

子どもの「学び」点数化できる？

1月30日の朝日新聞朝刊1面トップに大阪市教育委員会の方針として「テスト結果で校長評価」と。吉村洋文市長の意向を受けたものだ。社会面にも「戸惑う校長」の見出しが並ぶ。大阪「維新政治」による、新たな教育への介入である。

前日29日には「テストの成績で先生を評価 大阪市が検討」と大きく報じていた。そのなかで標題「ダウン症のジェイミー君が通う小学校では」に注目した。昨年、リバティおおさかで開催された集会で、ジェイミー君の学校生活を記録した映像を見たことがある。



佐々木サミュエルズ・ジェイミー君(10)は、大阪市淀川区にある市立小学校に通う4年生だ。1年生の運動会。ダウン症のジェイミー君は「みんなといっしょ」ができなかったから、先生に手を引かれて走った。2年生の運動会。2人の同級生が伴走してくれて3人そろってゴールした。3年生の運動会。ひとりの男の子が、びりのジェイミー君を案じてか、ふり向きふり向き走っていたが、ジェイミー君はひとりで走りきった。母の純子さん(49)は「ようやく、みんなと同じように走れた」と泣いて喜んだ。

去年の秋、4年生の運動会。ジェイミー君は、1年前にふり向きながら走ってくれた男の子に手を引っぱられて、つんのめりながら走った。純子さんにとっては残念な光景だった。せっかくひとりで走れるようになったのに、なんで？

実はジェイミー君、この日登校した後、体調がすぐれず、運動会が始まる前に食べた給食を吐いていた。あの男の子は、ジェイミー君がひとりで走れることも、お手伝いが必要なときがあることも知っていた。手を引いたのは、いつもいっしょにいるからこそできた自然なふるまいだった。

ジェイミー君は、字が書けない。それなのに宿題やテストの答案用紙に先生は大きな花丸をつけてくる。先生によると、答えを書くマスの中に、読めないけれども「字」がきちんと収まっていることがジェイミー君の努力の証し。だから花丸なのだという。授業中に歩きまわって奇声をあげるジェイミー君が、じっと座ってテストをうけたことも花丸なのだ。

こうした「真相」をあとで知った純子さんは「これこそ公教育だなんて思います」と泣きながら振り返る。

子どもの「できる」「できない」に一喜一憂する親の世界とは別に、そんなこととは無関係なつながりが子どもの世界にはあることを、ジェイミー君の存在を丸ごと認めてくれる先生がいることを知った。

『『できる』って大事。でも、『できない』も認めてくれる学校ならば、すべての子どもに安心の場所となるのではないのでしょうか。外国にルーツを持つ子どもたちが増えていく日本社会にあって、一見異質な他者への柔軟性や寛容性を学び、多様性への適応力を身につけることが、これからの教育の鍵になっていくのではないのでしょうか』

それでもやっぱり、ジェイミー君がまわりの世話になっているのだからという思いからか、純子さんは少し遠慮がちに語る。

「もしもジェイミーといっしょにすることが、まわりの子どもたちにとって、テストの点数では測れない育ちと学びの機会になっているとしたら、こんなにうれしいことはありません」

純子さんは、教員や学校の評価が児童・生徒のテストの点数で決められることを恐れる。そんな仕組みの中においてジェイミー君は迷惑な存在でしかないからだ。

(2019年2月1日)